

# 時代を超える黒髪へのおもい

ひらまつりゅうえん  
平松隆円 (化粧心理学者／大学教授)

## 黒髪之美

黒髪といえば、なによりも平安時代の長い髪を思い浮かべるでしょう。この時代、打垂髪もしくは垂髪という、黒くて長い髪が美人の条件とされてきました。清小納言も「枕草子」のなかで、髪の長いひとを「うらやましげなるもの」としてあげているくらいです。

では、どれほど長かったのでしょうか。平安時代中期に成立した『うつほ物語』では、髪が艶やかでふさふさとあり、その長さは七尺(二一〇cm)とあります。

おおよそ、平安文学に表現される美しい髪の長さは、六尺以上でした。髪が、長ければ長いほど、美しいとされていたのです。

歴史物語である『大鏡』には、藤原氏一門のなかでも、とくに美人といわれた藤原芳子について述べています。そこでは、藤原芳子が牛車のなかにもいてもなお、髪のが先が住居の柱に巻きついていたほどに、髪が長かったという話が残されています。

もちろん、髪がそれほどまでに長く伸びるとは考えられません。一般的に、髪の成長は一日平均〇・四mm。一年で約一〇cm。髪は寿命は三年から五年といわれています。伸びても、五〇cmにも満たないわけです。

藤原芳子の髪の長さの真偽はともかく、やはり長い髪が美しいという意識が存在したからこそ、この逸話は生まれたのでしょう。

『古事記』のなかにも、大変な美人だった諸原君の娘の名前として、髪長比賣かみながひめといっ

グラビアアイドルの増蜜さん。のっち、かしゆか、あくちゃんという三人組のテクノポップユニットPerfume。

この両者に共通するものはなにか、と聞かれて答えられれば立派なものです。わかりますか？ 答えは、黒髪です。

最近、その黒髪が、またブームなんです。日本人はどちらかといえば、地毛の色は黒が多いといわれています。だから、黒髪がブームというのはへんかもしれません。

一九九〇年頃から、髪を金髪に染めることがはやりました。それが茶髪となって、いまでは髪の色が黒ではないことが、定着しています。

一時期は、髪を染めることへの過剰な反応もありました。中学や高校などで、地毛が茶色であるにもかかわらず、強制的に生徒の髪を黒に染めさせるといって「体罰問題」もあつたり。そんな髪の色が、二〇年のときを経て、茶色から黒色へと戻ったんです。

黒髪が流行している理由は、いろいろあります。二〇年という時間が、逆に黒髪を新鮮

にみせていること。茶色のギャルっぽいイメージに対して、黒色が上品な雰囲気や、清楚にみえるなど。「CanCam」(小学館)や

「JJ」(光文社)など、女性ファッション誌も、昨年の巻くころから黒髪の特集をはじめました。

ほかに、長引く不況で髪を染めるお金がもったいないからだとか、地肌ケアや髪への意識の高まりから染めて髪を傷めないためだとかさまざまです。

髪が茶色に染められはじめたとき、若いひとたちは口々に言いました。黒色だと重い印象で、暗いひとだとおもわれる。それに、茶色のほうがかわいいと。

おしゃれはまさに、文化や時代によって異なることを、意味しているわけです。そう考えたとき、日本の歴史のなかで黒髪はどう考えられていたのか、気になります。

そこで今回は、少し時代をさかのぼって、黒髪について考えてみたいとおもいます。

が登場します。その名前の通り、髪が長かったのかについては、わかりません。けれども、髪長比賣の名が美人の代名詞となり、そこから垂髪の長い髪を美とする意識が芽生えたのではないかと考えることもできます。

ですが、わざわざ美人とされる娘の名前を髪長比賣とすることは、髪が長いことが美人であること以上のことを、ものがたっているといえます。

というのも髪長比賣は、のちに仁徳天皇の妃となります。応神天皇が使いをたして迎えますが、仁徳天皇となる大鷦鷯尊（おほはたけのみこと）が髪長比賣に恋心をいだいたため、髪長比賣を皇子にあたることになるのです。あまりの美貌から、応神天皇と仁徳天皇から寵愛を受けたのです。

栄華をほこった藤原氏で、もっとも美人とされた藤原芳子は、現実的とはいえないほど、髪が長かったとされるされています。髪長比賣をふまえて考えると、為政者の立場から、髪が長いという表現をもって、意図的に美人をつくりだした可能性もあるんです。

ただ黒いだけでは美しくない

しかし、髪はただ長ければいいというわけではありませんでした。艶やかな黒色の髪であることが、美しいとされていたからです。

『夜半の寢覚』では、カフセミの羽の青色になぞらえ、『浜松中納言物語』では、金の漆などのように、ひとの姿が映ってみえるく

らい艶々としているのが美しいと、表現しています。

黒い髪といっても、たんなる黒色ではだめでした。艶やかで、深い黒色の髪が、愛でられたのです。

日本の伝統色には、黒色と一口にいつても、漆黒や紫黒にはじまり、黒椽、黒鷲、黒紅、鉄黒、黒檀、濡羽色などいろいろあります。濃いねずみ色に近い黒の黒椽、暗い赤褐色の鷲色が暗くなった黒鷲、青みを帯びた黒の濡羽色など、日本人は黒色に対して、ひとかたならぬ想いを抱いてきたのです。

黒色の違いを愛でる心が、黒髪の表情を愛でる心へと、つながっています。そして、艶やかな黒髪が美人の条件となりました。

また、それも身丈よりも長く、髪先はふさふさと裾引いている。そんな髪が愛でられ、そのような髪をもつ女性が美人とされました。じつは、日本人の黒髪に対する美意識は、もつと古くから存在します。『万葉集』には、女性が黒髪をなびかせ、積極的に男性を魅惑する「おほかたはたが見むとかもぬはたまのわが黒髪をなびけてをらむ」という歌が詠われています。すでに、黒髪を愛でる意識が、万葉の時代からあったんです。

不美人を表現する

黒髪を愛でる一方で、黒くない髪、短い髪は不美人の象徴でもありました。

『うつほ物語』では、散る花は頭に積もる

白い雪で、白髪のようにみえると、白髪が老いの表現として登場します。

もし、白髪をみつけたら、抜かずにはおれないのです。清少納言は『枕草子』のなかの「ありがたきもの」として、毛がよく抜ける白金の毛抜きをあげています。白髪を老いとしてとらえるのは、現代だけのことではないのです。

『万葉集』には、天皇、公家から下級官人、防人などさまざま身分のひとが詠んだ歌が収められています。そのなかには、仁徳天皇の皇后で、履中天皇や反正天皇の母である磐之媛命（いわのひめのみこと）の作とされる歌も収められています。

磐之媛命は、とても嫉妬深い女性でした。磐之媛命が熊野に行啓したとき、仁徳天皇が応神天皇の娘である八田皇女を宮中に入れたことに激怒し、山城の筒城宮に移り、同地で没したといわれています。

霜が降り積もったかのように、豊かで美しい黒髪に白髪が混じるまで、仁徳天皇が来るのを待ち焦がれていました。「ありつつも君をば待たむうちなびくわが黒髪に霜の置くまで」という、磐之媛命の作とされる歌から、『万葉集』が編まれた時代でも、すでに白髪が老いの表現となっていたことがわかるとおもいます。

白髪による老いは、みためだけの問題ではなく、死期が近いことを意味します。そのことも、白髪が忌み嫌われた理由の一つです。

た。

鎌倉時代に成立した『平家物語』に、七三歳という高齢の齋藤別当実盛が登場します。平安末期の武将である実盛は、保元の乱、平治の乱においては上洛し、源義朝の忠実な部将として奮戦しました。しかし、義朝が滅亡したあとは関東に落ち延び、平宗盛に仕え、東国における歴戦の有力武将として重用されることになりました。

寿永二(一一八三)年、平維盛らと木曾義仲追討のため北陸に出陣した実盛は、老人が大將かとおもわれたのでは仕える主人に申し訳ないと、白髪を黒く染めて出陣したのでした。

実盛が討ち取られ、その首を洗ったところ、髪がみるみる白くなったといえます。水で洗ってすぐ落ちたということは、おそらく



髪を染める齋藤実盛(『前賢故実』)

墨を塗っていたのでしよう。

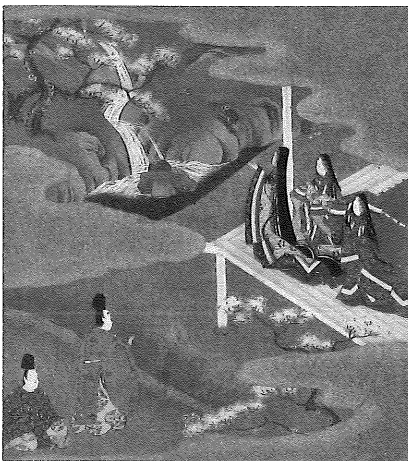
黒く染めることで、若々しくみせていたのです。この白髪を老いととらえ、嫌う意識は平安時代から現代まで途絶えることなく、受け継がれています。

美しくするには

髪を美しく保つには、どうすればいいのでしょうか。平安時代では、髪は一日に何度か梳ることによって、長くなると考えられていました。

そしてもし、髪を洗うときには、植物を焼いた灰を水に浸してできる、上澄み液の灰汁が使用されていました。この他にも、洗髪や整髪のために、泔という米のとき汁、美男葛という実葛の蔓の粘液などが用いられていました。

泔は、たんに髪や頭皮を清潔に保つために利用されていたわけではありません。頭に血



土佐光起筆『源氏物語画帖』より「若紫」

が上り熱くなると、眼を悪くし頭痛を引き起こすため、それを泔で解熱したりもされていました。

当時は、髪を洗うのも一苦勞でした。現代では、毎日のように入浴時に髪を洗っていますが、平安の世では一日がかりの大仕事だったのです。

終日を費やすため、毎日髪を洗うというわけにはいきません。髪を洗う日が、月に何度かと決められていました。そしてそれは、江戸時代になっても、同じように日が決められていました。

髪を洗うのはもちろん、それ以上に乾かすのも大変でした。生乾きのままにしてしまうと、くせがついてしまい、長く艶やかでまっすくな黒髪にはならないからです。

『つづほ物語』に、こんな話が登場します。髪が乾ききっていないうちに、女一の宮は大将殿によばれました。それを知った右近の乳母は、髪が乾ききってから行った方がよいと諭すのです。

その理由は、出産したその日のうちに、からだを求めてくるような大将殿であるから、髪が乾いていないことなど気にも留めず、髪を求めてくる。だから、髪に変なくせがついたら困るのだというものでした。

右近の乳母は、大将殿に迫られる姫の貞操よりも、せっかく洗った髪にくせがつく。その方が心配だったので。それほどまでに、髪は大事にされていました。

「髪の長きは七難隠す」と、髪の長いことは、他の欠点を隠してしまうということわざが、今にも残っていますが、なによりも髪的美しさが大事でした。

神頼みも辞さない

当時の女性たちは、美しい髪を手に入れるためには、どんなことでもしていました。ここでは『うつほ物語』をみると、髪を洗いに七月七日に、加茂川までかけていったことがわかります。七月七日は、乞巧奠でした。

乞巧奠とは、女性が手芸・裁縫などの上達を祈った儀式のことです。もともとは、中国の行事で、奈良時代、宮中の節会としてとり入れられました。日本に在来した棚機女の伝説や祓えの行事と結びつき、民間にも普及して、現在の七夕行事となつていきます。

加茂川は、平安京における東限です。東アジアには、大地の四方の方角を司る四神の存在を認める四神相応説があります。

これによれば、北に玄武、東に青龍、西に白虎、南に朱雀が配置されます。そして、地勢が流水である青竜は、加茂川に対応するんです。

つまり、美しい髪を手に入れる願いを青竜に託し、加茂川の水で髪を洗ったのでしよう。

女性に必須の技芸の上達を願う七月七日に、髪を加茂川で洗うことにより、長く豊

かで美しい髪を得られると考えていたので。ただ、乞巧奠に加茂川に髪を洗いにかけたのは、女性だけではなく、男性も一緒でした。七夕の牽牛と織姫の物語にあわせて、公家たち男女の出会いの場として、この髪を洗うという行事が位置づけられていたのかもしれない。

髪を洗う日が決められていた一方で、九月と一〇月は、髪が洗われませんでした。他にも、四月や五月も髪を洗いませんでした。これは、中国伝来の陰陽五行説にもつき、天文、暦数、卜筮などの知識を用いて吉凶・禍福を占う陰陽道が関係しています。

つまり、髪を洗うことが、物事の禁忌と関係し自由にはならなかったのです。髪を洗う日が決められていたのは、髪を洗うのが大変だからというだけではなく、吉凶の意味もあったんです。

ところで宇都宮地方には、髪の毛を切って竹の根元に埋めると髪の毛が黒くなるということわざがあります。竹といえはおもいだすのは、竹取の翁夫婦に育てられて輝くばかりの美しい姫に成長したかぐや姫。彼女は、あまりの美しさから、五人の貴公子や帝からも求愛されます。

どうやらかぐや姫にあやかり、俗信に頼ってでも、美しい髪を手に入れることを願い、女性は竹の根元に自らの髪を埋めたようです。

そんなことをおこなうまでに、美しい髪は

大事だったんです。

時代を超える黒髪へのおもい

さて、いまの黒髪のブーム。もちろん若いひとたちは、平安時代の事情など知らないでしょう。ですが、黒が上品な雰囲気や、清楚にみえる意識は、じつはそんなに変わっていないのではないかとおもつのです。

現代の若者たちが黒髪に憧れを抱いている。これは、時代を超えた日本人の美意識だといえるのではないのでしょうか。

ブームとして終わるのか。これからまた、定着するのか。黒髪をめぐる諸相の変化が楽しみです。